Nagano Prefectural Museum of History

長野県立歴史館たより

2005年 夏号 vol.43

夏季企画展

地下4mの「縄文伝説」

―屋代遺跡群　愛と出会いの4千年―

7月16日(土)
〜
9月4日(日)

千曲市屋代遺跡群の調査で見つかった縄文中期後葉（約四二〇〇年前）の土器には、長野県で出土したものとはとても思えないほど東北地方の土器によく似たものがあります。自動車もなく馬さえもいない縄文時代ですが、その背景には人の交流や、物の交換があったと考えられます。それはおそらく文化を異にした人と人が出会い、相手を拒否せずに受け入れることから始まったのではないでしょうか。

仮に土器の作り手を女性、交易の担い手を男性としましょう。「ふたりが出会った先にある、新しい文化を伝え、創造する力」、言い換えれば「愛」をテーマとしたストーリーを企画展で公開することにしました。

トミメに土器を渡すイサナ

企画展の構成

企画展示室での展示のほかに、エントランスホールでの漫画によるストーリー紹介やミュージカルもおこないます。

企画展示室

テーマ一

屋代遺跡群で出土した大木系土器のふるさと東北地方の貝塚と渦巻き文土器を紹介します。〈里浜貝塚出土重要文化財骨角器類、繋Ⅴ遺跡出土重要文化財大木8b式樽形土器ほか〉

テーマ二

屋代遺跡群の土器の把手には越後の火焔型土器に後続する在地の土器の特徴が見えます。そこで、把手の変遷を追いつつ、雪国の華麗な縄文中期の土器文化を紹介します。〈笹山遺跡出土国宝火焔型土器・大木系土器ほか〉

テーマ三

渦巻き文様と華麗な把手が融合して雪国で生まれた土器は、青年イサナたち黒曜石の交易集団とともに「チクマ河畔」の「ヤシロ村」にもたらされ、村娘トミメのものになります。トミメはもらった土器をまねて、周辺の村人とともに土器を作り続け、生涯を終えます。ここでは屋代遺跡群の集落と周辺の景観を、発掘調査された遺構のパネルや復元模型で展示します。さらに周辺遺跡を含めた土器・石器やそれらの科学分析結果によって、千曲川水系の縄文文化を多角的に概観します。

テーマ四

やがて千曲川の度重なる氾濫によってヤシロ村は地表下4mに埋もれていきました。パネルが堆積のプロセスを語ります。

屋代遺跡群縄文中期後葉集落（模型）

博物館ミュージカル

「縄文伝説」のストーリーを劇に組み立て、館職員が常設展示室で演じます。伴奏はジャンベ太鼓とキーボードでおこないます。

期日は八月七日（日）午前一一時・八月一四日（日）午後三時・八月二八日（日）午後三時で、常設展示室縄文コーナーで四〇分程度上演する予定です。幻想的な縄文の世界を、是非ご覧ください。

文献史料をよむ

一ツ橋派風刺の瓦版それとも落書？

細田家文書の一枚の史料

8 細田家文書-18-1

右の写真は、当館所蔵細田家文書中の一史料（請求番号　八ー一八ー一）です。大きさは縦約二九cm横三八cmで、木版刷りでなく筆で書かれています。

「瓦版」には、版木や土版木（瓦）に彫って印刷し、街頭でにぎやかに売るものと、幕府の政治を批判するような内容の原稿を印刷せず筆写（書き写）して、ひそかに短時間に売るというものがありました。これは幕府による取り締まりから逃れるためでした。売る側だけでなく買った側も罰せられたので、読んだらすぐに燃やしてしまう約束になっていました。この史料は、筆写物の瓦版が燃やされずに残ったものという可能性があります。もう一つの可能性は、引札（商品広告ちらし）をパロディー化した落書（匿名の為政者批判文書）という線です。「一橋齋」という塗り薬の宣伝ちらしに形を借りた、一ツ橋派風刺になっています。

幕末の政治は、開国・通商といった対外政策と、第一三代将軍家定の継嗣問題などで複雑に揺れ動きました。水戸徳川斉昭を盟主に家定継嗣に一ツ橋慶喜（後の一五代将軍）を立て、雄藩連合による幕政改革をおこなおうとした親藩（御三家・御三卿の分家など）や西南外様雄藩（薩摩・土佐・宇和島など）は「一ツ橋派」と称されました。いっぽう井伊直弼を盟主とする譜代大名（当時老中など幕閣を輩出し、幕政を掌握する）や紀伊徳川家は、紀伊徳川慶福（のちの一四代将軍家茂）を継嗣に推し「南紀派」と言われました。対外的には、現幕閣南紀派は、欧米による砲艦外交の前に、「開国・通商やむなし」とする立場でした。これに対抗する意味もあって一ツ橋派は尊王攘夷を唱えました。

この史料では、まず毒川斎脇（徳川斉昭のこと）軒製造の「一橋齋」の効能（一橋派の政治運動の結果）を一〇個列記しています（上から一段目の一つ書き）。続いて、効能の実例を一一例（〇～の箇条書き）あげています。三段目には、使用中の注意を記し、禁物として南紀派の紀伊国蜜柑（紀伊藩）・近江源五郎鮒（井伊彦根藩）・肥後ずいき（会津藩）を挙げ、さらに水戸家の親族を販売店として紹介し、購入を願います。

金看板許可の販売店として長州藩と水戸天狗党の首領武田高運斎（武田耕雲斎のこと）をあげ、つぎに一橋斎（徳川慶喜）の江戸屋敷、京都・大坂の宿舎や水戸家の江戸藩邸を記しています。「内証（親族）」に一ツ橋家の親族大名を、「取次」に水戸徳川家の親族大名などを販売店（一ツ橋派）として記しています。

制作期は、「武田高運斎」の前に「蘇生堂古中」、「西・中両国江軍兵」「長州征伐之刻云々」とあることから、元治二年・慶応元年（一八六五）頃と考えられます。作者は政界や諸大名の姻戚関係にも通じた下級武士やインテリ町人でしょうか。

常設展示室から

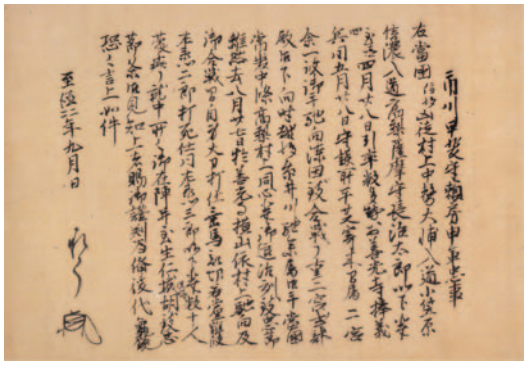
原始

ドイツ連邦共和国で開催された「日本の考古―曙光の時代―」展から帰ってきた日向林B遺跡の石器を展示しています。昨年開催されたこの展示には日本を代表する考古資料が出品されました。多くの国宝や重要文化財と並んで、日本の先土器（旧石器）時代を代表する資料として選定されました。ヨーロッパにはない旧石器時代の磨製石器を見たドイツの人たちはさぞかし驚いたことでしょう。

日向林Ｂ遺跡の磨製の石斧（当館蔵）

古代中世

市河文書は北信濃の豪族中野氏、ついで市河氏に伝来した古文書（全一四七通、一六巻、重要文化財）です。信濃国における中世について詳しく知ることのできる貴重な史料です。当館では開館以来この古文書の全巻複製事業を所蔵者の本間美術館（山形県酒田市）の許可を得ておこなっています。昨年度は第一三巻が完成しました。今回はあたらしく複製されたこの巻を展示します。村上・高梨・長沼氏らが善光寺で挙兵し、当時守護所のあった平柴（長野市）を攻めたことを記した文書（市河頼房軍忠状）など南北朝時代の動乱のようすを克明に映し出す文書が含まれます。



市河頼房軍忠状（複製　当館蔵）

近世

小テーマ「城と城下町」では、八月から『諸国名産図屏風』を展示します。この屏風は全国各地の名産品の生産や収穫のようすを一八枚の絵で紹介しています。宇治（京都府）の茶、伊丹（兵庫県）の酒造、松前（北海道）の昆布など有名なものから、箱根（神奈川県）の山椒魚、松前のオットセイなど珍しいものもあります。

江戸時代後半、各地で物産会が開かれるようになると名産品に関心が高まりました。この屏風は一八四〇年（天保一一）に、上方の俳人桜井梅室が描いたもので、当時の産業を知る貴重な資料です。この頃、名産品は商業の発達により諸国から信州にも入ってきました。

諸国名産図屏風（当館蔵）伊万里焼（佐賀県）

近現代

近現代では小テーマ「お蚕さま」の養蚕過程中心の展示を替えました。蚕に卵を産ませて販売する蚕種製造業は長野県でも盛んでした。蚕種業に使われた道具を展示しています。また、生糸の繊度（長さに対する重さ）を調べるために使用された検尺器などを展示しています。一個の繭から一〇〇〇m以上の生糸をとることができました。

歴史館さんぽ

ヤマドリとキジ

常設展示室の「縄文のムラ」の木に一羽のヤマドリがとまっています。

ヤマドリはキジ目キジ科の鳥で、本州から九州に生息しています。日本特有種で外国にはいません。少し前まではどこにでもいたそうですが、最近は数が減りめったに見かけなくなりました。

展示室のヤマドリ

日本の国鳥キジと似てますが、キジが緑色なのに対して、ヤマドリは赤いので区別できます。竪穴住居の中にキジがぶら下がっているので比べて見てください。緑と赤の特徴はオスのみに見られ、メスは両方とも茶色を基調でよく似ているため、素人では区別がつきません。

日本各地の縄文時代の遺跡からヤマドリの骨が出土してます。長野県内では北相木村の栃原岩陰洞窟から縄文時代早期のヤマドリの骨が見つかってます。このヤマドリは縄文人たちが食べたものと考えられます。現在でもヤマドリは狩りの対象となっていて、かなり美味しいと聞きます。縄文人にとってもヤマドリはごちそうだったに違いありません。

これでナットク!! 「明石原人」は原人じゃない?

Q、「明石原人」はどのくらい古いのですか。

A、「明石原人」とは一九三一年に兵庫県明石市の西八木海岸で発見された一点のヒトの寛骨（骨盤の左右の壁を形成する左右一対の骨）から命名された原人の名前です。

発見者の直良信夫は、人骨発見前に同じ地層からゾウなど更新世の絶滅動物の化石を発見していたことから、この人骨を旧石器時代のものと考えました。しかし、当時は縄文時代以前の日本列島にはヒトがいなかったと考えられたため、直良の説は受け入れられませんでした。そして、一九四五年に戦災により焼失してしまいます。

一九四六年にこの人骨の複製品を見た長谷部言人により、原人の骨と鑑定され「ニッポナントロプス＝アカシエンシス」（明石原人）と命名されました。

現在、「明石原人」を認める人はほとんどいません。見つかった骨は全身のごく一部分しかないこと、実物がないので化石化の度合いや、年代測定などの分析ができないことなどが理由となってます。

人類は猿人→原人→旧人→新人の過程を経て進化してきたと考えられてきました。現代人は新人にあたりますが、最近のＤＮＡの研究により、地球上すべての現代人の祖先は、約二〇万年前にアフリカで旧人から進化した新人となることがわかってきました。つまり、我われ日本人の祖先も約二〇万年前のアフリカの新人ということになります。現在、日本列島での人類の活動は約四万年前ぐらいまでしかさかのぼれません。この年代から考えると、日本列島最初のヒトは新人の可能性が高くなります。そうなると、日本列島には原人も旧人もいなかったことになります。

考古資料をよむ

地元に根付いた善光寺平のもう一つの古代仏教文化

篠ノ井遺跡群館蔵考古資料紹介八

篠ノ井遺跡群の瓦塔と塼仏

信濃の古代仏教といえば、善光寺や信濃国分寺が有名ですが、近年の遺跡の調査で、当時の朝廷や豪族がつくったお寺の仏教（伽藍仏教）以外に、地元に根ざした村むらの仏教（草堂仏教）が息づいていたことがわかってきました。

とくに善光寺平の南部、篠ノ井周辺には「廃寺」や仏教関係の遺跡があります。

篠ノ井橋付近の千曲川に面する古代の大集落遺跡である篠ノ井遺跡群からは、瓦塔や塼仏が出土しています。瓦塔は焼物で、最近の研究では集落の中にまつられて、地元の人が普段参拝したとされています。

塼仏は型に粘土をあてて作った焼物の仏さまです。本来は何枚も同じ型から作ってタイルのようにお寺の壁に敷き詰めて使うものでしたが、地域によっては一枚一枚を、瓦塔などと同様にご本尊として大切にまつっていたものもあったようです。館蔵品の仏以外にも、長野市の調査で二点の塼仏が出土しています。篠ノ井遺跡群以外の県内の遺跡では数点しか出土していないので、篠ノ井遺跡群の性格を考える上で注目されます。

瓦　塔

なお、篠ノ井遺跡群の仏は本来、一光三尊仏であったと考えられますが、出土したものは脇侍（仏・如来の両脇に立つ菩薩）の部分です。

塼　仏

則天文字風の墨書土器

篠ノ井遺跡群では、墨書土器が多量に出土しています。墨書土器とは古代の人が日用の食器などに一ないし二文字を墨で書いたものです。墨書土器自体は長野県では、多くの古代遺跡からもたいてい出土します。これは、当時の識字率が私たちの想像以上に高いことを示しているかもしれません。

いずれにせよ地元の人びとが直接書いた文字なので、古代の人びとの「こころ」を知る上で非常に貴重な資料です。墨書土器の多くは当時の人びとが住んでいたムラや一族のことを示す地名や人名などが省略されたものが書かれていました。このほかに、まじないや道教にかかわる文字があるとされています。

さらに、篠ノ井遺跡群では今普通に使われている漢字とはちょっと違う文字が出土して注目されています。これは則天文字の影響が見られる文字だと言われています。

則天文字は今から約千三百年前、中国で唯一の女性の皇帝である則天武后（武則天）が作った文字です。十数種類の文字が作られたことが知られていますが、今はほとんど使われていません。則天武后は熱心に仏教を信仰していたことが知られています。この文字が仮に則天文字の影響を受けているとすれば、むしろ仏教と関係があるのかもしれません。

墨書土器に書かれた文字

研究の窓

大谷探検隊を巡る信州人
～藤村と真宗寺の人びと～

島崎藤村と大谷探検隊

「君は印度に於ける仏蹟探検の事実を聞いたことがあるか。その運動に参加した僧侶の一人は斯の老僧の子息さんで、娘の婿にあたる学士も矢張り一行の中に加はつた人だ。学士は当時英国留学中であつたが病弱な体躯を提て一行に加はり、印度内地及び錫蘭に於ける阿育王の遺跡などを探り、更に英国の方へ引返して行く途中で客死した。此学士の記念の絵葉書が、沢山飯山の寺に遺って居た。（後略）」

これは島崎藤村が『千曲川のスケッチ』で飯山のことについて書いている一部分です。老僧の子息である井上弘円、学士である藤井宣正の西欧やインドからの絵はがきを飯山真宗寺で目にした藤村は、『椰子の葉陰』という、彼らをモデルにした小説を書き上げました。

後に藤村がこの老僧、寂英を『破戒』の中で好色住職のモデルにしたというので、老僧の奥方は「藤村には二度とこの寺の敷居をまたがせない」と憤ったといいます。この寺の娘さんを妻とした高野辰之が、「小説のモデルはあくまでも作品中の創作人物であって、実在の人物ではない」という記事を某紙に掲載して、義理の母の心を慰めています。

この老僧、寂英という人は、幕末維新の動乱期には懐刀を持って京都へ馳せ上り、本山の護衛を命がけで行った志操堅固で豪傑の気風を持った人物で、『破戒』中の好色住職とは正反対の人物でした。明治始めの廃仏毀釈から日本の宗教界を救った島地黙雷とも親交があり、後に東京に住んだ黙雷に、自分の愛娘、瑞枝を預けて教育してもらっています。瑞枝は宣正と結婚しますが、文才があって、女流随筆家となります。

瑞枝の妹（辰之の妻）も幼い頃からミルンというお雇い外国人（英国の地質学者）の日本人妻、トネ＝ミルンに預けられたことがあります。我が子を幼くして遊学させた真宗寺の老僧夫妻は当時としては希に見る教育熱心な人たちであったことがわかります。

大谷探検隊とは

「大谷探検隊」というのは探検を主宰した大谷光瑞という西本願寺門主の姓を取って西欧では「大谷ミッション」と呼ばれ、その翻訳語としての名称です。

第一次（一九〇二年）から第三次（一九一四年）まで一二年間にわたって実施した探検は、シルクロードのすべてに足跡を刻み、中央アジアからの将来品も総計約三万六千点余りに上りました。しかし、今次大戦直後の混乱で、旅順博物館に約二万六五〇〇点（北京へ何百点か移管）、韓国国立中央博物館に約一七〇〇点、東京国立博物館に約六〇〇点、龍谷大学に約七〇〇〇点と、五か所に分散、収蔵されています。

一九〇二年まで、随員と共にあしかけ三年の英国留学をしていた光瑞は、父が重病に罹ったため、本山から矢のような帰国の催促電報を受け、ついに帰る決心をしました。しかし帰国するに当たっては、中央アジアを回ってシルクロード探検をしながら帰国することにし、ロンドンで準備をしました。しかし、単に思いつきで探検隊を組織したのではなく、早い時期から中央アジアに熱い視線を送っていたことが最近の研究でわかっています。

信州人の隊員たち

光瑞に随行した四人の随員（第一次探検隊員）は、欧州留学時からずっと付き添っていた若者たちでした。そのうち一人は飯山真宗寺の井上弘円、もう一人は高山村徳正寺の本多恵隆という信州人でした。なぜ四人のうち二人が信州出身者なのだろうと考えてみると、雪深い山国に育ったために、身体が頑健であったことも大きな要因であるように思えます。彼らは語学力も抜群で、武道の心得もありました。

探検一〇〇年を記念して、近年中国・韓国などとの研究交流も大幅に進み、また多くの隊員たちの史資料も発掘され、総合的な研究が飛躍的に進みました。

写真は一九三七年（昭和一二）に発行された初版本（限定版）の『新西域記』上下二巻（長野県立歴史館蔵）です。当時の隊員たちの探検記録と写真で構成されています。

（本多得爾）

『新西域記』上巻中のちょうど100年前の写真。ルンビニ（釈迦生誕地）のアショーカ王碑を中心にして。碑のすぐ左側の人物が弘円。恵隆撮影。

表紙の写真の説明

屋代遺跡群出土縄文中期後葉土器群（当館蔵）

上信越自動車道建設のための発掘調査で見つかった縄文土器はコンテナ1500箱にのぼります。中心でスポットライトを浴びているのが、「縄文伝説」のナビゲーターの大木系土器「キューちゃん」4200歳です。右側は地元の圧痕隆帯文土器、後ろは加曽利Ｅ式土器です。

■行事アルバム

【4月10日　長野県の遺跡発掘2004　講演会】

駒沢大学助教授設楽博己氏により「弥生時代における漢文化の影響」をテーマに講演会が開かれました。弥生時代の顔面付き土器や古墳時代の埴輪、また土器などに描かれた龍に中国の漢の影響がみられるとの興味深い講演となりました。

【5月22日　第１回古文書講座（中級）】

受付開始後すぐに定員となった大人気の講座です。参加者は真剣に古文書の解読にとりくんでいます。

長野県立歴史館たより　夏号　vol.43

2005年6月17日発行

編集・発行　長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代清水 科野の里歴史公園内
電話 026-274-2000(代)　FAX 026-274-3996
E-mail mail@npmh.net
ホームページ http://www.npmh.net

印刷　奥山印刷工業株式会社

INFORMATION
インフォメーション

■2005年
7月～10月の行事予定

7月

休館日
4・11
19・25

企画展

夏季企画展
地下４ｍの「縄文伝説」
－屋代遺跡群愛と出会いの４千年－
7/16～9/4
7/24　企画展講座①
「大木系土器を生んだ東北地方の歴史と風土」、「大河にはぐくまれた文化」ほか
7/30　講演会①
「善光寺平地下６ｍに埋もれた遺跡群のなぞ」
講師：赤羽貞幸氏（信州大学教授）
8/7　講演会②
「酒？・クルミ・クリ、縄文人の植物文化」
講師：辻誠一郎氏（東京大学教授）
9/3　企画展講座②
「屋代遺跡群の縄文“愛”伝説うらばなし」
博物館ミュージカル
8/7・8/14・8/28
展示解説
7/30・8/14・8/28

講　座

7/2　長野県立歴史館飯山公開講座
古文書講座
7/9　初級・上級（第３回）
7/10　中級（第３回）
考古学講座
7/18 屋代遺跡群出土の縄文イノシシ（第３回）

常設展示替え

庶民の旅
工女の生活
自由民権運動と社会運動
大正デモクラシーと女性

企画展

石のアクセサリーづくり
7/16～8/28（休館日を除く毎日）
手作り栞づくり
7/23～8/27の毎週土曜日

常設展示替え

大塔合戦から川中島合戦へ

8月

休館日
1・8
22・29

9月

休館日
5～12
20・26

9/5～12
くん蒸期間中休館

常設展示替え

中山道の明治維新

講　座

古文書講座
9/17　初級・上級（第4回）
9/18　中級（第4回）
考古学講座
9/24　東畑遺跡と犀川流域の縄文文化（第４回）

10月

休館日
3・11
17・24
31

企画展

秋季企画展
信州舞台物語
－団十郎も須磨子もやってきた－
10/1～11/13
10/8　講演会①
「7代目市川団十郎と信州」講師：服部幸雄氏（千葉大学名誉教授）
10/16　講演会②
「信州の民俗芸能」
講師：堀井正子氏（日本近代文学研究家）
10/23　人形芝居公演
10/29　映画会
10/1～11/13体験学習
「くるくるアニメをつくる」
展示解説
10/2・10/9・10/30
11/6

講　座

古文書講座
10/15　初級・上級（第5回）
10/16　中級（第5回）
考古学講座
10/30　遺跡探訪会（第５回）

常設展示替え

石器の地域性
金属器の普及
ムラの生活
東山道をむすぶ
東アジアと信濃
職人のいる風景
大庄屋の仕事と暮らし
長野県の誕生と分県移庁
信州ブランドを売り込む
戦時下の県民のくらし